紀南教会瓦版

発行元
紀南ｷﾘｽﾄ教会
紀南教会瓦版編集委員
和歌山県田辺市
下屋敷町８０
TEL/EAX
0739-25-1191

緑の季節になりましたが、今年は季候が定まらず、朝晩は冷えて日中は初夏を思わせるような気温になります。衣替えを何時にしようかと悩みます。
白浜では早くに海開きをしました。本格的な夏に向かって邁進です。
油断して体調を崩さないように、お元気で日々をお過ごし下さい。

編集員一同

古い自分・新しい自分

―古い自分の独り言―

最近、加速度的に政治が悪くなっているような気がする。利権を持つ者の力で危険な原発を再稼働させようとする動き。近隣諸国との争いを武力で解決するために憲法を改悪しようとする動き。などなど、報道を読むたびに憂鬱になる。そしてその報道自体に力を持つ人々の意見を代弁する傾向を感じる。

人間の力で悪い流れを押し止めることが出来るように感じた時代もあったが、今はとてもそう感じることが出来ない。

もともと人間にはそんな力がなかったのにそう感じていただけだったのかも知れないが・・。とすれば、人間は破滅に向かって進むしかないのか。

神様の御心が分からない人間には神様の「沈黙」の意味が分からない。しかし、神様は人間が滅びることを望んでおられない。ますます分からない。

分からないと言えば、マタイ伝の「悪人にも善人にも太陽を登らせ、良いものにも悪いものにも雨を・・」だ。確かに人間は悪いものだから、その場に置かれれば私も原発推進を唱え始めるのかもしれない。しかし自分たちの利益のために多くの人を不幸に陥れる人間の行為に対し神は「沈黙」するのだろうか。分からない。

確かに自分の罪深さを自覚すれば「どちらも悪」と考えることが出来る。また、そう思った方が（心の中で許した方が）気持ちも楽になる。しかしそれで現実に悪の犠牲になる人々はどうなるのだろう。犠牲になった後で慰めればいいのだろうか。分からない。

―新しい自分の独り言―

自分を振り返ってみる。今ある自分の生活。家族との生活。苦労もありながら喜びもたくさんある生活はまさに神様からの賜物だ。神様の導き、教えなしにはありえなかった。

古い自分が持っていた数々の罪深い資質がガラッと変わったとは到底言えないが、古い自分のままではないと感じる。「人を裁くな」「怒りに対して怒りで返すな」「与えるは受けるより幸い」自分が追い詰められた時、ふっとこの言葉が浮かんできて平安な心に戻してくれた。

今、神様から与えられているたくさんの恵みを覚えることよりもこの世の中の動きに目を奪われて憂鬱になるのは自分の問題であると思う。この自分にしみついた根深い課題。困ったものだ。

オープンウォーター

この時期になると皇居の堀に引っ越すカルガモの親子が話題になる。母鳥の後をよちよち歩くひな鳥が何ともユーモラスでほほえましい光景だ。一方、人間は幼い子供を虐待する悲しい事件が後を絶たない。何故、そこまでいってしまうのか。本能的な愛と共に人格的な愛を兼ね備えているはずの人間が動物以下になり下がっている現実はどこが、何が狂っているのだろうか。

万物の創造主なる神は全ての動物を作り、それぞれに子孫を絶やさないように生きる力と知恵を与えられた。特に母には母親特有の子を宿し、愛し、育てる使命を与えられた。この世(社会)の絆で最も強い絆が「母と子の絆」だ。父と子や、夫婦、兄弟の絆よりも強い

「父と母を敬え」

紀南教会牧師　上山耕司

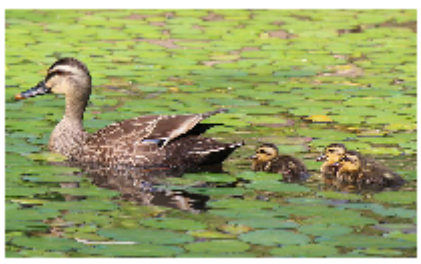
ものだ。何故それほど強いものなのか。それは動物的、本能的と言ってもよいものである。

早朝、公園を散歩中、後ろでドサッと音がした。音のした松林の方を振り向くと、なんと真っ黒い鳥が松の木の根元に落ちていた。よく見るとカラスの子供で、歩くのもままならない。私が大丈夫だろうかと、近寄って行こうとすると、ガー、ガーと大きなだみ声が聞こえた。上を見あげると、松の枝から一匹のカラスがこちらをにらんでいた。どうも母ガラスらしい。「わたしのかわいい子に手を出すと承知しないわよ」と言わんばかりに、今にも攻撃してきそうな殺気を感じた。わたしは慌てて身を引いた。動物の雌には雄にはないそのような本能がある。それは子孫が絶えないようにする神から与えられた配剤であろうか。

一方、子は親を、母親を大切にする本能があるのかといえば、ない。独り立ちが出来るようになると親から離れていく。動物はそれっきりである。年老いた母ガラスを大切にする子ガラスがあるだろうか。カルガモにしろ、カラスにしろ年老いて死期が近づいて、弱っている親にその子供がえさを運んだり、敵から守ることはしない。

しかし、人間は違う。神は人間にだけに「あなたの父と母を敬え」と、成人になっても親を大切にせよ、と命じている。それは、本能的なものではなく、人格的な愛の行為として命じている。父や母を敬う心や感謝する気持ちは、神を敬う心や感謝する気持ちに深く関係がある。神は万物を造り、全てのものを愛を持って治めておられる。そして、何よりも神は私たち一人一人を例外なく、その行いによるのではなく、存在自体をかけがえのないものとして、命がけで愛して下さるのである。父を与え、母を与え、私たちをこの世に生まれ出させてくださったのは神である。神は、私たちをその父母にゆだねられた。だから父や母は神の代理人なのだ。神を敬う者は当然、その代理人である父母を敬う者とされる。それと同時に、子を愛し、さらに隣人への愛へと広がっていくのである。

「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることが出来る。」
(出エジプト記二〇：一二)



はてな?

知人が、ご先祖代々の古い墓を整地しなおして、苔むした小さな墓石が幾つもあったのを整理して両親と祖父母の分だけにしたという。どこで判ったのか?百年前の人の骨壺が土中から出てきたという。

家の仏壇も修理に出し、金箔を張り直し、吊されているジャラジャラした物を新しいのに取り替えたという。墓が綺麗にスッキリし、仏壇も新ピカになって戻り、今日ようやく住職さんに念仏を唱えてもらって抜いていた魂を入れてもらったとの話しだった。「相当の出費だったんやろうな。」と思わず口から漏れた。「まあ・・・な。これで私らの代の義務も果たせたわ。」とおっしゃる。

人間の都合で念仏で魂を抜いたり入れたりする?念仏は何て言っているのか分かるのかな?魂はそんなものか?と思うが、信じている人にとってはそうらしい。なぜ信じられるの?

小さい時から周りの大人がそのように言うのを聞いて育ったから?、或いは何の疑問も感じないで習慣をそのまま踏襲している?。

お墓を美しくするのはよいことだと思うが、価は知るよしもないが相当な出費だろう。それを今、生きている人の幸せのためになぜ用いないのかと思えて仕方がない。家族の良い思い出のために旅行しても良いんじゃないか。病や生活に苦しんでいる人もいるだろう。そのような人を助けるものであってくれたらと思ってしまう。人のことながら、二度と戻らないその時を記念しなさいヨ、と思ってしまう。念仏の意味を私は知らない。

聖書は日本語で読みやすく書かれているからどれだけ読んでも考えることが出来る。神様・・・と話しかけることも出来る。つくづくクリスチャンで良かったと思う。それを伝えたいが、簡単には伝わるものでもない。

明・歌

しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装って下さる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。

(マタイによる福音書六章二九．三〇節)

この蘭にどのようなことを書くのがいいのかと迷い続けて37回目です。

4月24日の晩、長年使い続けてきた携帯電話が突如壊れてしまい、いわゆるスマホに一新しました。薄々感じていたその予感通り電話機というより情報通信機能をメインにしたパソコンだということを実感しています。遅ればせながら自分なりにどういう使い方をしようかトライの最中です。

次号、38号は2013年8月25日発行予定。